

死と言語

田島 正樹

『存在と時間』においてハイデガーの存在論は、特有の視野の狭さに囚はれてゐる。それは彼が、意図性 (intentionality) とか時間性に存在論への導きを求めた結果である。つまり、アリストテレスの分析を一貫して導いてきたアリアドネの糸——言語のアプリオリな構造の分析を通じて、存在のアプリオリな分析を得ようとする伝統を、ハイデガーは弊履のように投げ捨てたのだが、その結果得られたものは、概してみすぼらしいものにすぎなかった (数や色の存在についていかなる存在論的分析が用意されていたのか? と問ふだけで、そのみすぼらしさは一目瞭然とならう)。

我々は、死の取り扱いにおいても、ハイデガーの独自の視点が、この点(存在論と言語論との無関係さと貧しさ)に関はってゐると感じてゐるので、果たしてそこでも何らかのオルタナティブが可能かどうか、そして、そのオルタナティブが存在論や言語論(のオルタナティブ)といかなる関わりをもち得るか、問い返してみたい。

ハイデガーは、周知のやうに死を「ひとごと」として考へる思考を頽落したものと見なすが、「先駆した死の思考によって自己の存在を本来的・全体的に考へることができる」としたハイデガーは、はたして正しいのであらうか? むしろ、死は常に他者の死として本来的に出合はれるものであり、「自己の死によって完結する生の全体性」とは、ナルシスティックな幻想にすぎないのではないか? 他者の死を死の思考の原点に取ることは、言語の始原、それゆえ思考そのものの原点として、他者の死を見直すことに我々を導くはずである。我々をいやおうもなく暴力的に思考へと駆り立てるのは、はたして自分自身の死の可能性であらうか、それとも他者の死であらうか? ここには、我々の思考の大きな岐路が存在するだらう。

ちなみに、未来はハイデガーでは存在可能性として考へられるが、この点でもハイデガーの真の意図、つまり時間の超越性を際立てることは、全く失敗してゐる。可能性として現れる未来とは、何ら超越性をもたないからである。